

(研究ノート)

ジョン・ファウルズの『日誌』 —最後の小説としての「とりとめのないもの」—

星野英樹

キーワード

ジョン・ファウルズ 日記文学 リンネ ヴァージニア・ウルフ 博物学

はじめに

『マゴット』(A Maggot, 1985) につぐ小説の新刊が待ち望まれるなか、ジョン・ファウルズ (John Fowles, 1926-2005) は、のちに続巻も出版されることになる『日誌』(The Journals) の第1巻を2003年におくりだした。20世紀で言えば、ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) やフランツ・カフカ (Franz Kafka, 1883-1924) の日記はフィクションと並ぶ傑作としての評価が高く、作家研究、作品研究の貴重な研究資料となっている。ファウルズの『日誌』も、出版後、数々の書評が書かれ、最新の研究書でも活用されており、これまでに発表された作品の研究に欠かせない重要な原典の1つと言える。

本研究ノートでは、膨大な量の原稿から選別してまとめられた2分冊の『日誌』の編集作業に注目し、完成した『日誌』のうち主として第1巻を中心に、ファウルズ作品と日記の関係、研究に対する視座について考察することを目的とする。

I

ファウルズの『日誌』第1巻は、イギリスのガーディアン紙の書評で、以下ように紹介されている。

1962年3月24日、36歳になる1週間前、ジョン・ファウルズはこう記している。「古い日記 (diaries) を読み返す。うぬぼれ、見栄、期待の途方もない噴出。そうした欠点を抑圧する誘惑に駆られる。しかし、そうしたら日記はだめになる。」

その点では、日記はみごとにだめになっていない。大変な編集作業 (原稿は約200万語にもおよぶ) にもかかわらず、この第1巻は自己解剖のマニュアルのように読める。つまり、一切が抑圧されず、すべてが曝されているのである。博物学の愛好家としてのファウルズが、小さな蜘蛛や蘭を食い入るように見つめるのを楽しむのと同じように、自身のパーソナリティの様々な「仮面」をめくって剥ぎ取る様子が見て取れるのだ。痛みを伴えば伴うほど、より一層深く触手を伸ばす。

日記は1949年に始まる。オックスフォードの最終学年で、「衝撃的な個性を見出す必要性」、自意識過剰のあまり「新たな知り合い、新たな出会い、新たな場所」でしか究極的満足は得られないことに気づいた年である。運良く、すぐにフランスに住むことになり、ギリシャではブリティッシュ・カウンシルのために教職に就き、スペインとモロッコを旅し、途中、恋愛を経験する。

しかし、こうした感情がもつれ合う人間関係（未来の妻に会うことになる情熱的な三角関係を含めて）でさえ、自己磨砕機の役に立っている。「愛」とは「自己分析のすばらしい手助けである」と。たしかに、日記が終わるのは、待望の最初の小説『コレクター』(The Collector, 1963)が刊行され、国際的な名声を得た3年後の1965年で、ファウルズは自身を分離した人間であり、自己と「スキゾフレニア」状態の対話をしていると認識している。

成熟するにつれ、「客観性」や「実存主義的意志」より貧困や結婚について思い悩むようになってゆく。しかし、彼の知的忍耐力や（オブザーバー紙の文芸賞は「恥ずべき墮落行為」である、と評するような）芸術的高潔さは頑なに最後まで維持されていて印象的である。¹⁾

ファウルズの作品群に親しんでいる読者であれば、この紹介文で使われる表現に、ファウルズの文学を語る際のキーワードを容易に見出すであろう。たとえば「博物学の愛好家」、「フランス文化偏愛」、「ギリシャ滞在経験」、「複雑な恋愛関係」、「自己分析」、そして「芸術的高潔さ」等である。つまり、文筆活動の最初において、のちに生み出されてゆく作品を彩る色調が、若書きの日記のなかにすでに色濃く反映しているのである。

その意味で、長大な「日誌」記録をていねいに読み込んでゆくことは、ファウルズの作品研究にとって極めて意義深い作業と言える。一般読者にも近づきやすい編集版として、『日誌』は現在、全2巻として刊行されているが、編集版には一長一短があることに注意を喚起しておくのも無駄ではないだろう。元原稿量が膨大で判読しにくい箇所が多い、限られた関係者にしか興味がない記述が数多く含まれる場合など、優れた専門家が入念な編集作業を経て抜粋版を作成することは意味がある反面、編集者の視点で削ぎ落とされる部分によっては、日記を書いた作家の像が大きく変わってしまう可能性も否定できない。したがって、編集者の編集方針は極めて重要な意味を持つ。

イギリスの小説家の日記と言えば、ファウルズに半世紀先行するヴァージニア・ウルフの『ある作家の日記』(A Writer's Diary, 1953)も文学史上、重要な作品の一つに挙げられている。夫であり、編者でもあるレナード・ウルフ (Leonard Woolf, 1900-1969) は、その抜粋版である日記の編集方針について、序文で以下のように述べている。

私の考えでは、一般に日記や手帳からのぬきがきを公表するのは、ほとんどまちがいだと思う。とりわけ生きている人たちの感情や信用をまもるために省略をしなければならない場合はこう言えるだろう。こうした省略は日記や手紙を書いた人の本当の性格をほとんどつねにゆがめたり隠したりし、いわば精神的に修正されたよそよそきの写真のようなものを生み出す。つまり、しわやいぼやしらかめつらやでこぼこなどをなめらかに消してしまうという物質的操作が文章の上でもほどこされてしまうのである。最善の場合、そして全然削除されていない場合でさえ、日記というものは筆者の肖像をゆがめるか、またその一面を描き出すにすぎない。²⁾

私は二六冊の日記を注意ぶかく読みとおし、その中から彼女自身の文筆活動に関連している箇所のほとんどすべてを取り出し、本書に公表する。またそのほかに三種類のぬきがきをした。

第一は明らかに作文の練習をする方法として日記を用いていると思われるいくつかの部分。第二は作品と直接間接に関係がなくても、いろいろな情景や人びとが彼女の心にじかにどのような印象を与えたか、について読者に参考になるような箇所を意図的にえらんだ。というのは、これらが彼女の芸術の素材だからである。第三に、彼女が読んでいたいろいろな本について評論している箇所をいくつかおさめた。

この本はヴァージニア・ウルフの作家としての意図、目標、方法について光を投げかける。それは芸術的生産ということを内側から描き出す稀有な心理的絵巻となっている。その価値と意義は、当然のことながら、ヴァージニア・ウルフの芸術の価値と意義如何に大きく依存している。³⁾

レナード・ウルフの死後、ヴァージニア・ウルフのしたためた日記26冊の全貌が全5巻に収められて刊行されることになるが、上記のふたつの相反する記述、すなわち、抜粋の否定と肯定は、著名な作家が残した膨大な量の日記を編集する際に向き合わざるを得ないジレンマを直截に伝えている。可能なかぎり作家の芸術性、創意を尊重して手を加えずに公刊するか、編集主幹の定めた基準で抜粋した編集版を提示するか、レナード・ウルフは後者を選択した。

いずれにしても日記の刊行は作家の作品研究に大きな刺激を与える。ヴァージニア・ウルフの日記を例にとれば、『ある作家の日記』の訳者で精神科医でもある神谷美恵子氏のウルフ研究は、精神疾患と創作の関係に新たな視座を切り開いた。神谷氏はレナード・ウルフの編集版である『ある作家の日記』刊行後に、ヴァージニア・ウルフの日記全体が順次、出版されることを知り、全5巻の出版を待ってウルフの研究を全うする予定であったが、果たされなかった。⁴⁾

II

一方、ファウルズの『日誌』の編集者チャールズ・ドレイジンが第1巻の「イントロダクション」で「日記」とその編集について以下のように解説を加えている。

日記とは、面と向かって人に言えないことが書ける場であり、怒り、落胆、偏見を自由に発散できる場である。そうした感情がいかに気まぐれなものであろうと問題ではない。

こうした日記を編集するに際し、私が第一に心がけたのは、この自由な思考である。とにかく検閲しないように意識したが、人を戸惑わせそうな多くの文章に気が咎めずにいるわけにもいかなかった。そこで、書いてしまったことを後悔して公開せずにおきたい記述があるかどうか、ジョンにじっくり考える機会を持ってもらおうと考えた。

話し合いの結果、後悔している記述はたくさんあるが、たしかに自分が書いたことであり、今から思えば愚かしく、間違っていて、中傷的かもしれないが、日誌に絶対的に必要なのは、当時、自分がどのように感じていたかを記録することだということがすぐにはっきりした。⁵⁾

この日誌の完全性に対するさらに大きな脅威は、刊行にあたり（20冊分の長編小説に優に相当する）200万語を凝縮する必要性に起因している。刊行できる長さまで短くするため、私は「優れた箇所」を単に寄せ集めるのではなく、長期的視点でジョンのキャラクター、興味、考え方の本質を抽出することを企図した。⁶⁾

抽出の過程で、あまりに散漫でまとまりがないためにジョンが「とりとめのないもの(Disjoints)」と呼んでいた日記にひとつの焦点と方向性が生まれた。⁷⁾

3

ヴァージニア・ウルフの日記の場合、書き手の死後の刊行であるため、生前に編集者と編集方針を話し合ったファウルズとは条件が異なるとは言え、膨大な量の日誌原稿に対して明確な方針に基づき、抜粋を行なう点でドレイジンとレナード・ウルフと同じ立場に立った。そして、抜粋をする行為が孕む問題点を、ファウルズ自身の著書にある警告を巧みに引用して説明している。

『木』という短い本の中で、ジョンは小説を書くことを未知の森に分け入ることにたとえている。「森や森林は想像可能などんなフィクションよりも実際のところ、繊細で捉えにくい。フィクションは、森の中の道をいろいろと選択する現実の多様性を表すことはできず、特定の道を1つ選ぶにすぎない。」と主張している。このくだりに編集者としての私の役割を表す比喩として感銘を受けた。選択していたかも知れない森の中の多くの道から1つの道を選んだわけであるから。森全体を捉えたい人は、ぜひ、テキサス大学オースチン校の人文科学図書館・博物館ハリランサムセンターに安全管理のもと委託されている完全で未編集の日記を参照していただきたい。⁸⁾

フィクションを森林になぞらえ、編集作業を、その森林に道を切り開く行為にたとえているのは興味深い比喩であるが、自然をめぐるエッセイ集である『木』には、森林にかぎらず動植物全般に対する区分け、分類への批判も含まれている。カナダのある生物学者のエッセイでも、「分類学の父」に対する容赦ないファウルズの批判が引用されている。

作家ジョン・ファウルズは、現在、アップサラにある、かつての住居の裏で入念に保存された聖地となっているリンネ自身の庭を訪ねて、ダーウィンの警告を繰り返している。ファウルズは、自分が爆心地に立ちおり、「人間の脳の中で起こる放射と突然変異は計り知れず、その状態が続いてゆく」ことに気づいていた。リンネの小区画の土壌は「知性を持った種が舞い落ち、地球全体に陰を落とすまでの木に成長している。」しかし、ファウルズはこう打ち明ける。「自分はリンネに対して異端者である」と。リンネが熱心に探求し、あるひとつの秩序の特別な位相に自然現象を分類しようとする植物の個別化に対して、ファウルズは反発しているのである。ファウルズは、それが私たちがその中にいるか外にいるかの視点だけで自然を定義してしまう人間中心主義へ向かう第一歩だと見ているのだ。ファウルズによれば、リンネの体系は、分類とラベル分けを行う代わりに「見て、理解して、経験する可能性」を捨て去ることを求めているのだ。あたかもカメラのファインダーをとおして自然をながめるかのように。「そして、それは」と彼は記している、「アップサラの知恵の木がもたらす苦い果実である」と。⁹⁾

ちなみに、前述のファウルズの『木』からの引用は、原著の以下の一節からのものである。

- 4 私にはリンネに対して異端者であり、リンネが晩年に正気を失ってしまったのは不思議ではなく、むしろ報いだと思う。彼が自然科学にもたらした手法の価値を疑うわけではない。その手法は、それ自体、アリストテレスの思想体系を巧みに拡張したものに過ぎず、リンネでなくとも他の誰かがすぐに作り出していたものだ。私は、ふつうの人間の意識に影響を与えた持続的な変化に疑念があるのである。¹⁰⁾

「リンネの体系は、分類とラベル分けを行う代わりに「見て、理解して、経験する可能性」を捨

て去ることを求めているのだ。あたかもカメラのファインダーをとおして自然をながめるかのよう
に。」これは、博物学者の理想的なあり方に対するファウルズ流の提言であり、自らの博物学に対
する考え方の明確な表明である。ファウルズの作品に登場する動植物を語る際には、見逃すことの
できない信条であろう。

III

ところで、『日誌』第1巻(1949-1965)の目次に示される見出しは以下のとおりである。

1. オックスフォード大学時代 (Oxford)
2. フランスでの1年 (A Year in France)
3. ある島とギリシャ (An Island and Greece)
4. 彼方の王女 (The Distant Princess)
5. エリザベス (Elizabeth)
6. イングランドへの帰還 (Return to England)
7. ロンドンでの結婚生活 (Married Life in London)
8. 子供のいない生活 (Childlessness)
9. パルナッソス山登頂 (Climbing Parnassus)
10. ライム・レジスへの逃避 (Escape to Lyme)

ファウルズの作品に馴染んでいる読者であれば、こうした見出しに即座に反応し、小説の特定の
シーンを立ち所に想起できるかもしれない。有り体に解説すれば、上記1から10の内容は、フラ
ンス文学専攻のオックスフォード大学在籍、フランス留学、英語教師としてのギリシャの男子校
赴任、最初の妻エリザベスとの出会いと結婚、ギリシャのパルナッソス山「登頂」、そして、かの
ライム・レジスへ居を定めるまでの、文字通りの「半生記」である。残りの「半生記」(1966-1990)
は第2巻で綴られるが、その「イントロダクション」で再び「とりとめのないもの (disjoints)」
をめぐる興味深い解説が加えられた。

ジョン・ファウルズは、自分の日誌を構成する断片と様々な相矛盾することの多い自己の集
積を「とりとめのないもの (disjoints)」と呼んでいる。必然的に、こうしたとりとめもない
ものは時間と状況の色に染まる。ジョンの日記は歳月を経て種々の様相を帯びてゆく。書く技
巧を試し高める練習帳、書物、演劇、映画の批評、旅行談、告白、情熱的な博物学者の覚書。
この日記はこうしたものすべてなのである。¹¹⁾

第1巻に納められた期間で、ジョンの日記は、彼の進歩の本質に関わる役割を担った。いわ
ば思考と創造性のためのエンジンだった。したがって大学生から人気作家への変身のための重
要なそうした歳月はゆったりと経過した。¹²⁾

日誌を締めくくるこの巻の前巻同様に主要なテーマは自然である。自然は、ジョンが生前、
絶えず並外れて大きな影響を受けたものとして認識していた。日誌の後半部分で、いかなる不
幸が襲いかかるうとも、自然界に見出す満足感によってたいがい打ち消されるのである。¹³⁾

私訳で「日記」「日誌」としたのは、それぞれ原文の'diary' 'journal'である。書評、「イントロダクション」とともに両語の使い分けは厳密ではなく、2語が互いに言い換えられて混在している。注目すべきは、第1巻、第2巻両方の「イントロダクション」に顔をのぞかせている「とりとめのないもの (disjoints)」という単語である。

一見「とりとめのないもの」として見える点々とした数々のエピソードも、特定の視点を据えることで線としてつながってゆく。その重要な視点のひとつが引用文にある「自然」と「満足感」であろう。『日誌』には、断片1つひとつとしても独立したエピソードとして魅力的な断章が数え切れないほどある。たとえば、26歳のファウルズがギリシャ滞在時の1952年に記した日記の一節がその一例である。長大な日誌には、こうした身近な動植物の観察と描写、そこから導き出される鋭い洞察が無数にある。いわば、画家が大作を仕上げる前に書き付けるデッサンのように、アマチュアのダーウィンが鳥、昆虫、植物をスケッチした断章が無尽蔵に眠っている。そうした「とりとめもない」断章は、ファウルズの研究にとって格好の資料であり、日常の細かな観察の堆積が後の代表作の土壌をいかに形成していったか、その過程をたどるための豊かな情報を提供する源なのである。ファウルズがあえて明みにだしたこの日誌を、読者は寄贈された遺産として享受し、研究者は作品の理解を深める有益な原典として活用する恩恵にあずかっているとさえよう。まずは1952年から断章を2編紹介しよう。

1月8日

朝、短い散歩に出かけた。海岸に荒い波が打ち寄せ、とても寒かった。鳥などいそうにない岸辺にカワセミが2羽とまっているのが見えた。チョウゲンボウやベニハシガラスらしいのやそのほかにも鳥が何羽かいた。花もたくさん咲いていた。シャロックスは、ここには鳥はいないと言う。でもいる可能性はおおいにありそうだ。自然の多様さは僕をわくわくさせる。博物学者はほかの誰よりもずっと優位な立場にいる。僕が新しい国を通るとき、鳥、花、昆虫は、僕自身の楽しみの視点から言っただけで、人や人が産み出した世界と同等の意味がある。ある種、遍在する聖域なのだ。¹⁴⁾

断章ながら、動植物の世界に対する偏愛の吐露、「聖域」とまで表現する信仰告白が瑞々しく露呈する。

10月14日

クロスキバホウジャク。ここではよく見かける蛾の一種だ。ときどき僕の部屋に舞い込んでくる。日向が大好きな生き物なのに、どうしてこの暗いところにやってくるのだろうか。ある日、じっと観察して、その理由がわかった。部屋の中を飛び回って、部屋にあるもの1つひとつの前に浮かんで詳しく調べていた。花を探しに来たのだ。この土地の今頃は、植物は湿気が多い日の当たらない丘の中腹や底部に育成する。そのことがわかるまで何年かかるのか。蛾にしても僕にしても。僕の場合はダーウィンとして。フィールド・スタディの魅力とは、遠いところにある様々な存在を記録しようとする試みである。ある種の旅行熱。すべてをわかってもらうこと。先日、白いセキレイが飛びながら餌を捕まえた後に特別な鳴き声を出すのに気づいた。難しい言語の新しい単語を覚えたような気分だ。¹⁵⁾

1頭の蛾に注がれる熱い視線。日常生活のなかでの動植物の観察記録のとりとめもない断章は、

自然界、世界、壮大な宇宙へと思考が広がる契機あるいは源泉として散在している。

そして、時間的にはやや遡るが、以下の断章は、独立したエピソードとしてもきわめて印象的であり、漂うただならぬ異様で神秘的な雰囲気は後の長編小説の自然描写を彷彿とさせる。

1950年12月8日

帰宅したとき、実に奇妙な鳥にかかわる体験をした。午前3時、町は静まり返っており、人気はなく、やや湿った霧が立ち込めていた。街灯が少し灯っていた。突如として、僕は蚊の泣くような無数の声に気づいた。まぎれもなく、ワキアカツグミのさえずりだった。いたるところ。空中に。家の屋根の上に。変わった鳴き声だ。とてもかすかで、甲高く、ギラギラ光るようなさえずり。吸気。その鳴き声には明瞭でか細い、ギラギラ光るようなところがあった。僕は「ギラギラ光るような」という形容詞について考え続けた。暗い部屋で突然、古い銀器が放つ幽かな閃光のような。風変わりで、遠くに聞こえる美しい響き。それから、広場の真ん中に立っていると、紛れもない雄のヒドリガモのさえずりが聞こえてきて、僕は急に身震いをした。どんな芸術もほとんど、また自然界ではモリヒバリを除いてまったく、かくも一瞬のうちに僕にこのような興奮や喜びを与えてくれるものはなかった。灰色で静かな内陸の町の真ん中で耳にするその野生的でロマンチックなさえずりの効果は、まさに電氣的ショックだった。まったく予期していなくて、僕にとっては特別な意味に満ちていた。ここにいる6万もの人のなかで僕がそのさえずりを聞くとは。僕は30分ものあいだ広場に立っていた。とても寒くて静かだった。その間、車一台、人つ子ひとり通らなかつた。やがて実感が湧いてきた。空は真っ暗だった。そこにまさに何があったのかわかるのなら、突然、スイッチが入ったかのように夜明けがやってくれるのなら、なんでも差し出していただろう。緑のチドリたちの鳴き声が何度も聞こえ、金色のチドリが迷子になったかのように広場を旋回し、あまりに低く飛んだのでその姿が見えるのではと思った。ワキアカツグミがそこらじゅうにいた。それから僕の耳にははっきり聞こえない官能的な鳴き声。持続的で細いキーキーという鳴き声とかすかに響くカサカサした音。そして、ヒドリガモの大群だけが立てる大きなザーツという音。比較的lowく飛んでいたに違いない。なんらかの理由で、きっと大規模な移動が行われていたのだ。そこに僕がたまたま遭遇したというわけだ。ここボワチエでなぜ誰も気づかないのか。僕は部屋に戻った。3時30分ごろだった。窓を開けた。ワキアカツグミの鳴き声がすぐに侵入してきた。緑のチドリたち。鉄道の操車場のほうを見つめた。突然、鉄道の上方でワキアカツグミのさえずりが一斉に始まった。まだ灯りがついている駅に気づいたかのように。少しして、さらにさえずりが聞こえた。結局、僕は凍えたのでベッドに入った。

僕は二つの世界をつないだのだとしみじみ感じた。バルコニーに立って、ワキアカツグミのさえずりを聞いていた僕は、この都市全体の誰よりもワイルドで神秘的な世界に身を置いていたのだ。

そして、それがあまりに計り知れないもので、そうした経験の激しさと魔法を移し変えることができないため僕は悲しくなり失望した。野鳥観察とワキアカツグミの狩りに今までこんなにも時間を費やしてきた経験があつてこそその魔法なのだ。

とてもすばらしい経験で、まったく予期していなかったために感銘も格段に大きかった。今日は一日中、空を見上げていたが、なにも見えなかつた。¹⁶⁾

終わりに

代表作『フランス軍中尉の女』(*The French Lieutenant's Woman*, 1969)の一節にもリンネ批判が現れている。

チャールズは進化論者と自称していたが、ほんとうにはダーウィンを理解していなかった。しかし当時は、ダーウィン自身でさえ理解していなかったのだ。この天才が覆したものはリンネのスカーラ・ナーツラエすなわち自然の梯子であった。この思想の根本原理は、神学におけるキリストの神格性と同様に不可欠である。ヌールラ・スペキエース・ノヴァ、つまり「新種は世界に入りえず」であった。この原理が、リンネが分類と命名に、つまり生存物を化石化することにとり憑かれていた事実を説明してくれる。今日の私たちには理解しうるものであるが、それは、現実には連続的な流動であるものを安定化し、固定化しようとする宿命的な暴挙であった。それ故リンネ自身が最後に狂ってしまったのも頷けるのである。かれは迷路に踏みこんだどと知っていたが、それが壁や隧道が果てしなく変動しつづける迷路であるとは知らなかった。¹⁷⁾

そして、この一節のすぐあとには、主人公が手にする化石の描写が続く。

それは、アンモナイトの痕跡を精巧かつ鮮明に遺したライアス石の美しい小断片であった。まさに小宇宙の縮図、十インチほどの石片に車輪の跡を刻んだ渦巻星雲と名付けるにふさわしいものだった。ラベルに日付と発見場所をきちんと記入したチャールズは、またも石蹴り遊びでもするみたいに科学の輪から——今度は愛の輪へと飛び移った。¹⁸⁾

「分類と命名に、つまり生存物を化石化することにとり憑かれていた」リンネの化石と化した世界観とは対照的に、少年のようなチャールズは、見つけた化石に宇宙の神秘を感じて愉悅に浸り、同時に女性の登場人物たちとの恋愛の世界に想いを馳せる。このように動植物のエピソードから生まれる深淵な哲学を「今度は愛の輪へと飛び移った」と表現される女性をめぐる物語と絡ませて描き出してゆくのがファウルズの真骨頂であるとするなら、その淵源は20代の『日誌』の「とりとめのないもの」に遡るのである。

こうした「とりとめのないもの」をつなぐことによって、それまで固定されていたファウルズの人と作品を新たに浮かび上がらせるのが研究者の使命であるが、「とりとめのないもの」を読むことは愛読者たちにとってはそれ自体、愉悅に満ちた体験であるにちがいない。

【注】(MLA方式に準拠)

1) *The Guardian*, Will Hammond, 12 October 2003.

8

2) 『ヴァージニア・ウルフ著作集 8 ある作家の日記』(みすず書房、1976年) p. vi.

3) 同上、p. vii.

4) 『神谷美恵子著作集 4 ヴァージニア・ウルフ研究』(みすず書房、1983年)「あとがき」参照。

5) John Fowles, *The Journals, Volume 1*, Northwestern University Press: Illinois, 2003, pp. xvi-xvii.

6) *Ibid.*, p. xvii.

7) *Ibid.*, p. xviii.

8) *Ibid.*, p. xviii.

- 9) David Suzuki and Wayne Grady, *Tree*, Greystone Books: Vancouver, 2004, pp.125-126.
- 10) John Fowles, *The Tree*, Vintage: London, 2000, p.29.
- 11) John Fowles: *The Journals, Volume II*, Northwestern University Press: Illinois, 2006, pp. xi-x.
- 12) *Ibid.*, pp. x-xi.
- 13) *Ibid.*, p. xii.
- 14) Fowles, *The Journals, Volume I*, p.149.
- 15) *Ibid.*, p.256.
- 16) *Ibid.*, pp.66-67.
- 17) ジョン・ファウルズ『フランス軍中尉の女』(サンリオ、1982年) p.45.
- 18) 同上、p.46.

【参考文献】

- ジョン・ファウルズ『フランス軍中尉の女』(サンリオ、1982年)
神谷美恵子『神谷美恵子著作集4 ヴァージニア・ウルフ研究』(みすず書房、1983年)
ヴァージニア・ウルフ『ヴァージニア・ウルフ著作集8 ある作家の日記』(みすず書房、1976年)
Aubrey, James, *Filming John Fowles*, MacFarland & Company: North Carolina, 2015.
Fowles, John, *The French Lieutenant's Woman*, Vintage: London, 2004.
_____. *The Journals, volume I*, Vintage: London, 2003.
_____. *The Journals, volume II*, Vintage: London, 2005.
_____. *The Tree*, Vintage: London, 2000.
Suzuki, David and Wayne Grady, *Tree: A Life Story*, Greystone Books: Vancouver, 2004.
Warburton, Eileen, *John Fowles: A Life in Two Worlds*, Viking: New York, 2004.
Woolf, Virginia, *A Writer's Diary*, ed. Leonard Woolf, Hogarth Press: London, 1953.

(受理 平成28年9月12日)